



第5回 授業研究

日時：平成29年12月6日(水) 第5校時

対象：ならのみ学級 3～6年 17名

授業者：授業者 松井 友莉那(T1) 鈴木 裕子(T2) 小林 正幸(T3) 前田 弥沙(T4)

教科・単元名	空気のふしぎを調べよう
この教材は	この単元では、空気を袋や容器に閉じ込めて力を加えたときの手ごたえから空気の存在を体感させることによって、実感を伴った理解を図る。また、空気を利用した活動を通して、空気を身近に感じ、興味・関心を広げるとともに、玉をより遠くに飛ばしたいという思いをもって、友達と対話しながら試行錯誤する過程で、図や言葉で自分の考えを表現する力を育てていく。
本時の目標	(例) <u>第3段階児童</u> 玉がよく飛ぶ条件について、経験を基に自分なりに考えをもち、表現したり、友達の意見を聞いたりすることができる。(5/7時間目)
研究主題のとらえ	<p>(例) <u>第3段階児童</u></p> <p>○主体的な学び 閉じ込めた空気の実験に興味や関心をもち、目的をもって活動に参加することや、結果を自ら振り返ったり、理由を考えたりすることが「主体的な学び」ととらえた。</p> <p>○対話的な学び 友達と協力したり、教え合ったりしながら実験に取り組むことや今までの生活経験や学習したことを基に、考えを表現したり、友達の意見を聞いたりすることも「対話的な学び」ととらえた。</p>  <p>○深い学び 閉じ込めた空気の実験を通して空気の存在や性質を理解したり、友達の考えに気付いたりすることや新たな疑問をもったり、日常生活の経験と結びつけようとしたりすることを「深い学び」ととらえた。</p>
成果と課題	<p><成果></p> <p>○「試す」の段階で児童が空気でっぼうと触れあうために多くの時間を使ったため、操作の仕方に慣れ、興味関心を高めることができた。</p> <p>○導入段階で、空気でっぼうの筒の中を見えなくすることによって、児童が玉の位置の違いによって飛ぶ距離が変わることに着目できた。</p>  <p><課題></p> <p>△自分なりの考えがもてるように図を用いて思考させる方法を授業で行ったが、うまく表現できない児童も見られたため、児童の意見を教師が聞き取ったり、言語化したりする必要性が考えられた。</p> <p>△予想、実験、結果という一連の流れを同じもの(実物)で行うことにより、それぞれをリンクさせて考えたり、比較したりしやすくなると考えられた。</p>